

【特集】

## 被服衛生学部会創立30周年を記念して 「Cool Biz」

名誉会員 実践女子大学・実践女子短期大学 学長 飯塚 幸子

30周年記念号への寄稿を大変光栄に存じます。発足以来の思い出が頭の中を巡ります。今日まで部会発展にお力を尽くされた歴代部会長ならびに会員の皆様に心から感謝致します。私は研究室から遠ざかって久しくなりましたので、お役に立つ情報をお伝え出来ませんが、思いつくままに雑感を述べさせていただきます。

今日、深刻な問題となっている地球温暖化の解決のために、京都議定書が2月16日に発効しました。世界に約束した日本の目標は、温室効果ガス排出量6%の削減です。1990年から2003年までに産業から出るCO<sub>2</sub>排出量は0.3%増、特に事務所や家庭から出るCO<sub>2</sub>排出量は31.4%も増加していると報ぜられています。温暖化によって生ずる様々な影響を防ぐために、また安心して暮らせる地球環境を次世代に引き渡すためにも、私たちが日常の生活の中で地球温暖化を防止する省エネ型の生活を心掛けることの自覚が求められています。

その一つとして、温室効果ガス削減のために夏のエアコンの温度設定を28℃にということで、環境省では夏のノーネクタイ、ノー上着ファッションを提唱しました。その名称を公募して決定したのが「Cool Biz」です。新しいビジネススタイルを普及しようというものです。

労働安全衛生法の関連規則は、事務室の気温を17～28℃に定めています。省エネ効果を上げるために国はこの上限温度を決めました。小泉首相は4月に「Cool Biz」の着想を宣言し、小池環境省はデザイナーにデザインを依頼し、愛知万博の会場でファッションショーが開かれました。「ネクタイと上着を脱げば、体感温度で2℃の差が出る、という研究結果に基づき「クールビズ」をお薦めします。」というキャッチフレーズです。

室温28℃の時の軽装着用（パンツ・ランニング、半袖ワイシャツ、ベルト、ズボン、靴下、靴）  
室温26℃の時のスーツ着用（軽装+ネクタイ+夏用背広上着）、において、温熱感申告がほぼ同じであった（省エネルギーセンター発表のデータ）、と示されています。また、クールビズの着こなしについて、ネクタイと上着がなくてもきちんと見えるようにとの配慮から、その襟元デザインのさまざまな工夫と、暑さでボタンを開けたときのアンダーウェアが見えないようにとの配慮、ノー上着のために目立つベルトのおしゃれ、靴との配色案までが細かく提案されています。

さて、被服衛生学の分野こそ、主導権を発揮するべきテーマだと思います。働く人達のおかれている環境条件と着衣、性差、年齢差等、作業量と代謝との関係、着衣の素材、吸湿、通気性等のデータ、着心地、も考慮した健康的な提案が出来るのではないかと思います。被服の最終目標は、人間が着用し生活した時の生理的、心理的、快適であります。被服衛生学の社会的アピールの更なる必要を感じました。若い研究者達の社会貢献と、一層の研究・発展を期待しています。

【特集】

## 被服衛生学部会創立30周年を記念して —被服衛生学部会と私—

名誉会員・神戸大学名誉教授・倉敷市立短期大学名誉教授 稲垣 和子

被服衛生学部会創立30周年、誠におめでとうございます。記念の会報に寄稿させていただきますことは身に余る光栄で嬉しく存じます。

ついこの間発足したように思いますが、早や30年、月日の経つ早さに驚きと感激を覚える次第です。発足以来長い年月を部会員の一人として学ばせて頂き、多くの諸先生方にお世話になりましたこと有り難く厚く御礼申し上げます。

さて、願いますと、母体である家政学会が設立されて55年になりますが、最初に研究委員会（現在の部会）が発足したのは被服整理学(矢部章彦先生御提唱)でした。当時染料の研究に携わっていた私はすぐ入会し、セミナーに毎年出席し協議にも参加していました。次いで被服構成学研究委員会が要望により発足、被服衛生学はその中の一分野(第4部門)として所属を認められるにすぎませんでした。悲しい思い出です。これらの経緯は会報15号に記述の通りですが、昭和51年10月渡辺ミチ先生、水梨サワ子先生のご盡力により無事に独立、被服衛生学研究委員会として発足しました。その頃、私は医学部衛生学教室で、衣服の体温生理学に関する実験的研究に取りかかっていたので、涙が出る程感無量でした。昭和55年に被服衛生学部会と改称、昭和56年には部会報創刊号が発行されました。

継続は力なり！ 昭和57年からは毎年セミナーが開催され、今夏は24回目を迎えられること、ご同慶の至りです。会員数も増加し、セミナーでは全国からあい集い、研究発表、協議討論が続けられてまいりました。喜ばしい限りです。私の感慨深い思い出としては、やはり責任ある立場でお世話を致しました第2回の於神戸国際会議場と、第17回の於倉敷ファッションセンターでのセミナーでしょうか。その折には多くの方々のご支援を頂き、相当の準備期間を要しましたが、近代的設備の整った会場で、無事に終了する事ができましたこと、改めて厚く御礼申し上げます。

想えば私と被服衛生学との出会いは、昭和25年に緒方洪平先生の特別講義聴講によりですが、直接のご指導は願っても叶えられぬことでした。但し“求めよさらば与えられん”で、10年後に神戸大学医学部戸田嘉秋先生の許でご指導を仰ぐことが許され、爾来長い間恩恵を蒙ることができました。新鮮な未来に向けての研究領域として、基礎から学ばせて頂きましたことは大きな喜びでした。今でこそサーマルマネキンは珍しくありませんが、戸田嘉秋先生は日本で最初のサーマルマネキン創製の医学研究者です。その人体により被服各種のclo値を測定考察を重ねました。模型人体は南極越冬隊の越冬用被服の作製のために文部省から依頼をうけ、特別に創製された等身銅製模型人体です。非常に精巧且つ正確であり、現在も実測可能、研究用として始動中です。衣服の保温力を推定する一般法則を見出すような精密度を必要とする実験は、サーマルマネキンによる測定法によらねば優れた値を得ることは極めてむづかしいと思います。寝具類(含む電気寝具)、和服、季節別成人男女衣服、毛皮類、各種民俗服、他・・・の保温力測定を行い、測定値を勘案して、衣服の保温力基準値の推定に関する実験的研究の論文を発表いたしました。新知見を得ることの喜びは何物にも勝ると実感、自信を得た次第です。またW.H.O.関係の依頼による全国的着衣調査に参加。小、中、高、大学生の着衣現状調査考察など、種々の環境温暖条件下での着衣実態は、時代の推移による変動もあり、少なくとも10年間隔で継続調査の必要があると私は考えます。本部会で共通研究課題として調査研究をされますことを希望いたします次第です。

30周年を迎え、被服衛生学の発展は非常にめざましいものを感じますが、真の健康衣服を目指し、快適で心豊かな生活を理想に、後進の方々のご研究を期待してやみません。部会の益々のご発展を願い、皆様のご健康とご健勝を祈り、お慶びの言葉とさせていただきます。

【特集】

## 部会創立30周年を迎えて

名誉会員・大阪教育大学名誉教授 奥窪 朝子

(社)日本家政学会被服衛生学部会が本年、創立30周年を迎えますことを心からお祝い申し上げます。近年における本部会の目覚ましい発展は、この部会で学び育て、頂いた私にとりまして感慨無量、歴代の部会長をはじめ会員各位のたゆまぬご精進・ご尽力によるものと深く感謝いたしております。

本年(2005年)は、Albert Einstein の奇跡の年100周年を記念した、国連の「世界物理年」です。奇しくも被爆60年を迎えました。6月から実施の、地球温暖化防止を目的とした政府提唱の「夏の軽装」Cool Bizは、今後の浸透度が注目されます。今、科学者として何をすべきか。

さて部会30年史における創立16~19周年(部会長を務めさせて頂いた)の足跡を、先ず検証してみたいと存じます。会員種別が、学生を加えて現行の正会員、賛助会員、学生会員、及び名誉会員へと改正(1992年)。被服衛生学セミナーの会期を、内容充実を図って2日を3日に拡充(1992年・第11回セミナーから実施)。(社)日本家政学会被服衛生学部会会報及び被服衛生学セミナー要旨集の国際標準逐次刊行物番号ISSNの取得(1994年)。一方、1994年度末の部会会員数は、4年間で31名増の140名(ちなみに2005年5月現在127名)。1994年の(社)日本家政学会年次大会における被服衛生学関係の研究発表件数は、年々増加して32件(2005年では14件)。役員任期に関し部会創立以来はじめて、I期2年II期を超えないことを実施(1992年から)。役員若返り、より多数の会員の運営への参加を図り、幹事会各係の活動が顕著に活発化した点も特筆されます。いわば1991~1994年度は、より強固な部会組織作りと運営による、部会活性化への貢献であったと位置付けられるのではないのでしょうか。偏に、会員の皆様のご熱意のたまものであったと感謝しております。

続くこの10年間は、それまで成し得なかった活動を見事に展開・実践されてきたことに感服しております。その最たる事業が、1996年度から隔年毎に開催されてきた本部会主催の公開講座であり、今年3月には記念すべき第5回、「衣服と健康の科学、最前線」(文部科学省科研費補助金研究成果公開促進費による)の実施。加えて、(社)日本家政学会被服衛生学部会編「衣服と健康の科学」2003年、丸善(株)より刊行も、評価されましょう。こうした実績の数々は、直接担当頂いた関係各位の献身的なご努力はもとより、会員の皆様が社会的ニーズに符合した先見性のある研究に挑戦され、その成果が構築された証左だと考えます。ご同慶の至りでございます。

部会会報には、実に多くの熱き提言が寄せられ、重要な研究課題が山積しています。会員の声を育むことが、魅力ある部会の礎となりましょう。平田前部会長のご提案「部会の中で年限を切った研究プロジェクトを立ち上げ、集中的な研究推進」(会報第22号巻頭言)に、期待しております。また、3月開幕した日本国際博覧会において生活介助ロボットに接し、「衣」の視点から、高齢者など歩行障害者に有用なロボット・スーツが、近い将来開発、実用化されることへの願望を高めた次第でございます。

被服衛生学部会の、40周年を展望した、さらなる充実・発展を祈念して止みません。

【特集】

## 被服衛生学部会創立30周年を記念して

名誉会員・名古屋女子大学名誉教授 酒井 清子

被服衛生学部会創立、月日の経つのは早く、長い様で短い年月の流れを感じ、なつかしく当時を思い出します。

部会創立30周年記念、心からお祝い申し上げます。

1970年、日本家政学会より各部会は、担当の先生方により誕生し活動が始まりました。発足当時の部会は家政学原論・家庭経営・家庭科教育・被服構成学・被服材料学・被服整理学・食品加工・調理実習の部会だったと思います。

わたしは被服構成学を担当しておりましたので、石毛フミ先生(東京家政大学)が被服構成学部会を創立され、部会の会員になり研究を致しました。

その後、渡辺ミチ先生(文化女子大学) 水梨サワ子先生(奈良女子大学) 両先生がご検討をされ被服衛生学部会を立ち上げられましたが、被服構成学部会の会員は多数に比べ被服衛生学部会は少数であったと思います。

両先生は、会員勧誘に大変ご努力なさいました。

当時の先生方は、三平和雄先生(大阪市立大学) 吉田敬一先生(実践女子大学) 稲垣和子先生(神戸大学) 中谷和先生(奈良女子大学) 福本富美子先生(和歌山大学) 田村照子先生(文化女子大学) 中橋美智子先生(東京学芸大学) 飯塚幸子先生(実践女子大学) 田口秀子先生(秋田大学) 酒井が中心となって、活躍したと記憶しております。

その後部会員も、他の部会より入会され多数の会員になりました。

創立者の渡辺ミチ先生 水梨サワ子先生のご意志が継がれ現在の部会の発展ではないかと思えます。被服衛生学部会こそ、ご苦勞はありますが、生活する上の必要条件である被服、健康な被服、体に無理のない着心地のよい快適被服である研究を進められ部会の発展に期待し、ますます、被服衛生学部会が大きく前進することを願ひ、私の拙いペンを閉じさせていただきます。

## 部会創立30周年を迎えて

名誉会員・和歌山大学名誉教授 福本 富美子

名誉会員・東京学芸大学名誉教授 中橋美智子

平成7年の部会報第15号において、「部会創立20周年を迎えての感慨」と題して所感を述べて頂き、あれから10年が経過致しました。今回、創立30周年記念としての節目の年である部会報第25号への寄稿、誠に光栄に存じます。昭和51年の発足以来、30年の被服衛生学部会の着実な発展を振り返りますと、感慨深い気持ちでいっぱいになります。

特にこの10年間、私にとって心に残る充実した思い出の多い年でした。平成7年から9年にかけて、部会長登倉専実先生とご一緒に、部会員の皆様に支えられながら、副部会長を務めさせて頂きました。会の運営などいろいろと大変なこともございましたが、登倉専実先生の強いリーダーシップのもと、充実した2年間を楽しく過ごさせて頂きました。その間、ラフォーレ修善寺および尚絅女学院でのセミナーでは副部会長としての重責、そして平成9年3月、ホテルフロラシオン青山での「被服と人間の健康」（科学研究補助金研究成果公開講座）は部会として初めての公開講座とあって、企画・運営そして実行などいろいろと大変な作業でしたが、皆様のご協力のもと充実した会を開催出来ましたこと、心より感謝申し上げます。

東京学芸大学定年後、この公開講座がご縁で、千葉県船橋市教育委員会より依頼があり、2年間「衣服と健康」に関する講演をさせて頂きました。研究の社会への還元は、特に生活科学の学問に携わる研究者の任務ともいえましょう。

また、定年後の八王子市教育委員としての在職期間中、現職の小・中学校家庭科の先生方との交流の機会にも恵まれました。身近な素材を活用した実験・実習教材開発の紹介や、校長会の折も、通学服の健康上の問題、夏の課外指導の服装のあり方(衣服の色・帽子)についての自己のデータ紹介の機会にも恵まれ、現場教育との交流を深めることができました。教育委員として自分なりの大きな役割を果たし得たことに満足し、意義ある4年間だと思っております。

現在も共同研究者と研究を継続しております。研究には楽しくロマンがある反面、経費とヒマがかかり、考えようによってはかなり贅沢なものであります。しかし、そこに無駄や遊びがあつてこそ、いきづまりのない研究が継続できるといえます。また、研究は人とのかかわりが大切です。人を得なければ研究は進みません。よきパートナーとの出会いが研究の継続と強く関わって参ります。今後も、よりよい衣服と健康に関わる研究を継続したいと願っております。

最後に、21世紀における被服衛生学部会の更なる発展を祈念して、筆をおきます。

被服衛生学部会発足当初からの歩みを振りかえり、30年間のこの部会の大いなる発展は、部会員諸氏の情熱と、リーダーの諸先生方に負うところが大きいと、改めて感謝と祝意の気持ちを述べていただく。

創立当時、私は被服構成学研究委員会（後に部会）第三部門（被服の設計・着装に関する衛生的諸問題）に所属し、前年度運営委員でご活躍くださった稲垣和子先生、佐野尚子先生のおあとを継いで、信州大学の関川信子先生とご一緒に運営委員の役に就いたばかりだった。したがって、51年10月の京都女子大学における被服衛生学研究委員会発足の第一回総会・講演会には出席できず、非常に悔しかった記憶がある。当時、各研究委員会は会場の都合もあって、大体同じような時間帯に総会が開催されていたため、運営委員をやっていると、重複するため、かけもち出席は困難だった。

爾來30年、人間（生体）の健康に視点をあてた被服衛生学は、教育系大学では必須科目であるため不可欠分野、そこに席を置く私は、調査研究や部会セミナーには可能な限り参加し、自分では究められない事象を学び、さまざまな情報をキャッチし、今日の目を迎えることができた。被服学の盛衰が云々される社会情勢のなかで、部会セミナーは今夏第24回開催の運びであり、会員数も増える等、部会の益々の発展は非常に嬉しい限りである。

近年、被服学関係部会合同セミナーが開催される等、被服領域の統合化がすすんでいる。各専門で究められたことをベースに、樹を見ても、森が容易に俯瞰できない現状から、社会の変化に対応べく新しい取り組みが求められてきている。人間の心とからだの健康をモットーに、衣服による自己表現が円滑にできない乳幼児・高齢者・障害者にとっての「心身に快い衣服とは」に向けての統合指針が課題であろうか。今夏のセミナーは「健康を支える衣服力」のテーマで、神戸市において開催される。30周年の節目、近未来の衣服について皆で考え、価値ある集いとしたいものである。

蛇足ながら、今夏の男性の服装について一言述べてさせていただく。衣替えの季節、急遽小泉首相主導のクールビズの提唱があった。被服衛生学分野においては、以前から夏季における男性のネクタイの弊害については実験データをもとに、度々報告されてきたことである。しかし、「軽装のすすめ」は容易に実践されなかった。が一方政府主導では、冷房温度を28℃にすることで、地球温暖化防止を目標に、京都議定書とのかかわりから軽装運動が提唱、実践されつつある。かつて、省エネルギーがもてはやされた時代もあったが長続きはせず、今夏のクールビズの登場である。家政学分野からの提言ではなく、「オカミ」の関与がなければ軽装化がすまない、クールビズも生体との関わりからでなく、地球環境との関わりからであることは、ちょっと悲しいことで、戦時中の決戦服スタイルを想起した。

今後、被服衛生学が社会に期待され、貢献すべく、部会員のさらなるご活躍を願う次第である。

## Interdisciplinary も後退か？

名誉会員 弓削 治 (元 大阪市立大学)

「現在までの科学技術の発展には、物理学や化学といった、いわゆる生命のない物質を対象とする学問が、いろいろの分野の発展に大きく寄与してきました。しかし、今後はこれらに加えて有機的な生命そのものを対象とする生物学が重要な役割を果たすでしょう。従って、人間をも含めた生物とこれを取り巻く環境を、大きな一つのシステムとしてとらえることが重要となっています」これは当時筆者が講演する際、冒頭にのべた文言である。1960年代後半のことだった。当時は新しい繊維が新しい加工が次々と発表されており、繊維だけでなく被服となった場合の、人間との係わり合いで追求していく必要があった。

× × × × × ×

当時、筆者は被服材料学を専攻、部会の設立を大阪市大田中教授と相談、他の被服専攻に先駆けて発足させた。第一回の被服材料学研究委員会(当時の名称)は夏季セミナーとして高野山大学で開催した。数年後、材料学部会員の日本女子大学大野先生と相談し、被服衛生学研究委員会の設立を話し合った。その後、文化女子大学渡辺先生のご賛同を得て本会が発足した。30年前の思い出である。

× × × × × ×

その頃、被服材料の加工技術を研究テーマとしており、将来性あると考えた抗菌防臭加工(当時は衛生加工と称していた)に明け暮れていた。この加工は対象が微生物であり、微生物学の勉強も余儀なくされた。しかし、微生物を対象とする問題は繊維だけでなく食品、木材、塗料、石油などがありそれらは既成の分野で研究が行われていた。しかし、既成の学問体系の中に閉じこもって研究することなく、異なった専門領域を埋める体制、すなわち Interdisciplinary を確立することが学問の発展にあると考え、防菌防霉研究会(5年後に学会)の設立に奔走した。1973年のことであった。

現在までの被服材料学は、物理的・化学的な検討に留まり、人間との係わりについては殆んどされていなかった。そこで、これらの問題を人体-被服-環境を一つのシステムとして捉え、快適で健康的な被服の研究を進めた。被服衛生学は人間との係わりを追求する上で、最も重要な柱であった。

然しながら、自己表現、着心地など技術を不得手とする特質が、更なる「衣」への進展を阻んでいるようである。ところが、この特質こそが「衣」にとっては重要な特性であることは言うまでもない。最近、コンピュータの高性能化、小型化が進みウェアラブルコンピュータが出現した。これは従来の製造や生産工程のみを助けるものではなく、24時間の日常生活を支援できるコンピュータとして変革を成し遂げるものとなった。これが「衣」に直接的な係わりをもつに至ったのである。

このような、新しい被服の創造の可能性のあるものとしてウェアラブルコンピュータを感じながらも、その特質を十分に理解できないでいる。今後は、被服の衛生とか材料とか整理などの壁を取っ払い、新しい価値をもつ知的被服を創造する必要性を感じている。

最後になりましたが、被服衛生学部会創立30周年を祝し、今後益々のご発展を祈念します。

## 被服衛生学部会創立30周年記念にかんして一雑感

名誉会員 吉田 敬

部会創立30周年おめでとうございます。またこの記念すべき会誌に執筆の機会を下さった事を厚く感謝いたします。

被服衛生学部会といえばやはり、故渡辺ミチ先生、故水梨サワ子先生を始め部会創立に尽力された先生方が思い出されます。これら先輩の被服衛生学に対する情熱と独特の和やかな雰囲気は現在まで受け継がれていますが、これも30年にわたって部会発展のため努力された会員と役員の方々のお力によるもので、改めて敬意を表します。

最近、被服学科という名称は勿論、家政学部という名称もどんどん消えていくのは社会情勢の変化とはいえ、少し淋しさを感じますが、被服衛生学の重要性は30年前とは少しも変わらず、益々重要となっていると思います。最近地球温暖化防止の目的でのクールビズとか、ノーネクタイ運動が提唱されています。省エネを目的とした冷房温度の上昇と薄着の奨励は以前より提唱されていましたが、中々実現しませんでした。省エネルギーという服装は嫌われ、消えてしまいました。単に上からの押しつけが原因と考えてよいか疑問です。また、新聞紙などに、クールビズ運動の経済効果が数億円以上と報じられています。この運動が本来の目的から外れて行く恐れもありそうです。

古い雑誌を整理していたら皇室のデザイナーの対談が載っており、その中に「どんな優れたデザインでも、着る人の心になじまないのでは、良い服とは言えません、衣装は人のためにあり、人が袖を通してこそ美しいもの。人間への愛情がなければ、良い服は決して作れません。・・・着る人の個性とデザイナーの精神が溶け合ったとき、初めて一枚の服に生命が宿るのです」と述べています。自分の持つ美という想いの表現の手段としての衣服のデザインは否定しませんが、衣服はやはり人間が着てこそ衣服であると思います。従って衣服の研究や製作には、形態、機能、心理等の人間側の条件。繊維材料、デザイン、着装等の衣服側の条件。物理的・化学的環境条件から社会的な条件など総合的な見方が必要となるわけです。このような総合的な見方の出来るのは、被服衛生学部会しか無いのではないのでしょうか。

今回の被服衛生学セミナーのテーマ「健康を支える衣服力」は時直を得たものと思います。健康の定義はご承知の、肉体的、精神的、ならびに社会的に完全に well-being な状態をいうのです。いろいろな面から大いに議論し、その成果を社会に向けて発信してください。